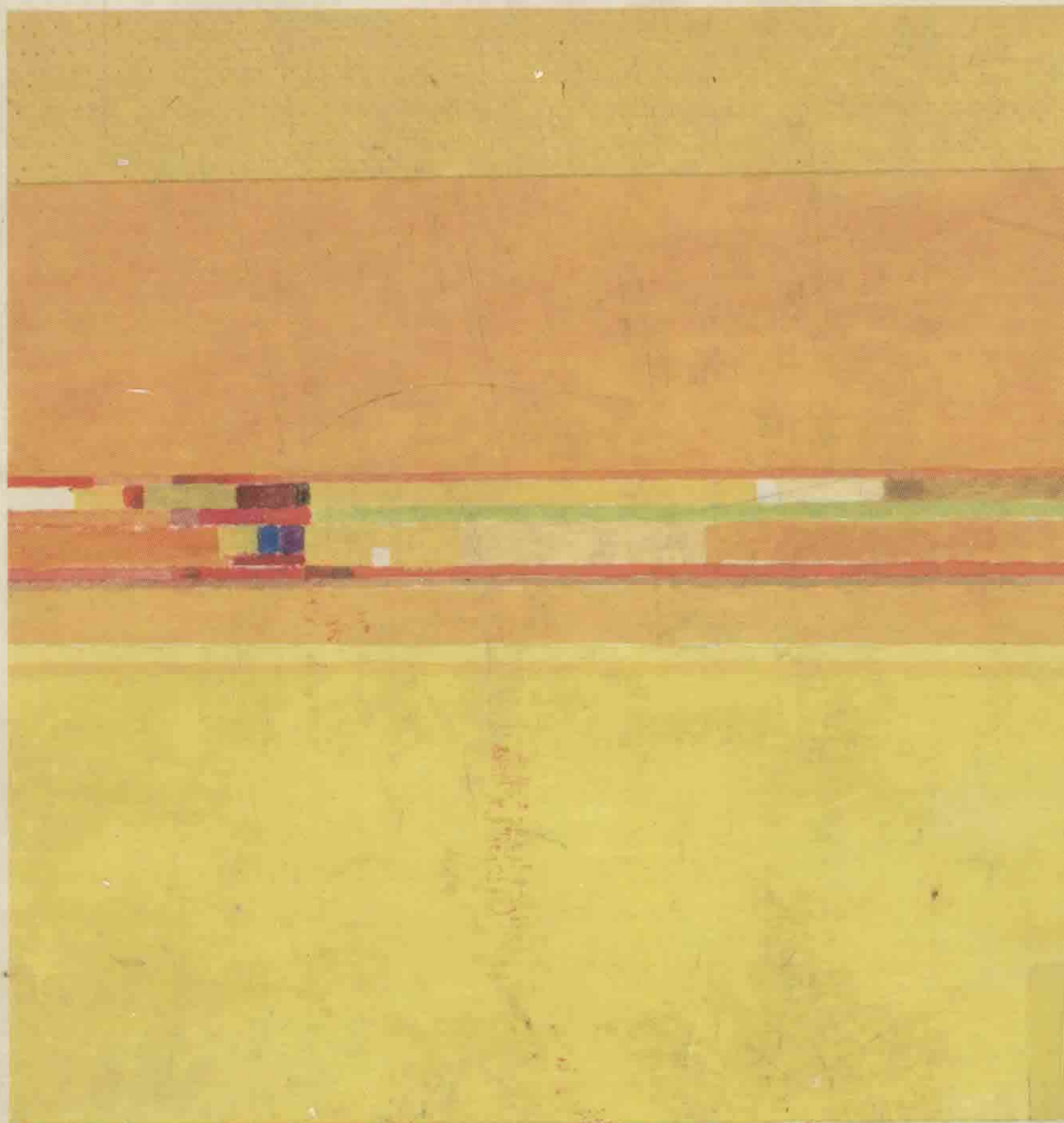


子育てごっこ

三好京三



子育てごっこ

三好京三

文藝春秋

子育てごっこ

昭和五十一年十一月三十日 第一刷
昭和五十二年三月二十日 第五刷

著者 三好京三

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 和田製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

著者略歴

昭和六年岩手県に生れる。
慶応義塾大学文学部国文学科(通信教育)卒。
昭和五十年、第四十一回
文学界新人賞受賞。
現在、岩手県水沢市立
真城小学校教諭。

子育てごっこ 目次

子育てごっこ

7

親もどきへ小説・きだみのるへ

137

装釘
坂田政則

子育てごっこ

子育てごっこ

第一章

一

袖浜地区をかかえこんだS村一帯は、三陸海岸の段丘の中でもひとときわ高く、昔は海岸線を走る汽車が難没して登りかね、一度戻ってから惰性をつけた上で登り直したことが再々だという。沿岸部で冬場に根雪になるのも、そのあたりではS村だけであつたから、浜から更に七キロも登りづめに奥に入った袖浜はもはや山村で、地名も袖浜ではなく袖山が似合うと村の者は言っている。

S小学校の袖浜分校は、その地区の中でもひととき目立つ高台にあつた。小ぢんまりした盆地状の聚落の中で、赤瓦に白壁のその分校は、ふとメルヘンの中のひそやかな学校に見えた。信吉と容子は、そこで足掛け十三年教師をつとめている。

校庭の南側の斜面を、重く排気音を荒だてて車の登る音がした。二人は、来たのかな、とい

うように顔を見合わせた。来訪者は、いつもそのようにしてやって来るのだった。車の爆音が、まちがいなくこの分校の門をくぐりそうだと、いうことを耳でたしかめてから、信吉と妻の容子は薄暗い宿直室から玄関に出た。

迎えたいほどの客ではなかった。

信吉は、初め、その放浪画家だという老人の来訪を、仲介役の友人を通して断っている。

「滋味のある老人ならいいがね。老耄おひぼれたヴァガボンドはいやだよ。鬱陶おんたうしいよ」
それでも友人の立野は連れてくるというのだった。

「村じゃ、もう、君のところぐらいしか、興味をひきそうなところがないんだ」

古くさい型の、そのくせ図体ばかりが大きい自動車が、校門の前の坂道を登り切って、夕暮の校庭に進路を変えた。平らな校庭に入っても、車は不器用にのろのろしていた。そして、今までの来訪者の誰もが止ったことのない、校庭の真ん中に停車した。

後部ドアが開いて、はじけるように桃色の洋服がとび出した。

十歳ほどの少女だった。

「わあ、竹馬がある」

少女は迎えに出た信吉たちには眼もくれず、玄関わきに立てかけておいた竹馬を持ち出して乗り始めた。乗るといいうのではなかった。片足をかけてはよろけ、竹馬を押したおしては膝をつき、した。

「こうするんだよ」

あとから降りた立野が乗ってみせた。

「いやん、貸して」

すぐにひったくって、少女はまたよろけ続ける。

そのころになって、老画家はやつと運転席から降り立った。そして、しきりに赤いシャツのポケットを探ったり、暗い車の中を緩慢に覗きこんだりした。

それから信吉たちに向かって歩き出した。思いのほか背が高くて、昔のノッポが大抵そうであるように、やや肩をまるくして首を覗かす恰好で近づいて来た。

いらっしやい、と迎えると、や、と軽く手を挙げ、勝手知ったように玄関を入ると、つかけて来たサンダルを脱ぎすて、大きな素足で廊下を歩き出した。

炬燵の前にあぐらをかいてから、

「いい所だ」

と、老画家は呟くように言った。それが挨拶のつもりらしかった。

酒をすすめると、いや、わしはこれを飲む、と言って、汚れた黄色い瓶をポケットから取り出した。

「フランスの労働者が飲む焼酎ですよ」

コップに半分ほどついで、勝手に飲むといったしぐさで舐めはじめたころ、廊下をかしまし

く響かせて、少女が宿直室にとびこんで来た。

「わあ、まだ炬燵あるの？」

「この辺の浜は、梅雨どきが寒いよ。だから七月にならないと炬燵を外さないの」

容子の説明を聞くふうもなく少女は炬燵に足をつっこみ、先に用意してあった皿の鮑をつまんで、

「食べていい？ 何ていう貝なの？」

口に運んでいた。

竹馬の訓練で汗ばんだ立野は、汗をふいて室に入りながら、

「驚いたでしょう、回転の速い子なんですよ」

好ましそうに少女を見ながら容子に言った。

少女は、ほとんど両手を交互に出すようにして、せわしく鮑を抓んでは口に入れ、あらためて三人の男が初対面の乾杯をしようとする頃には、大皿に盛った鮑が心細いほどに減っていた。含んだところがあるというほど隠微なものではなかったが、一度断った客と心おきなく談笑するためには、一応酔い痴れるというところまでアルコールを満たさなければならぬのが、信吉の気質であった。

画家の放浪した土地のようすなど、あたりさわりのないことを話題にしながら、意識的に立野との献酬を速めた。

すぐに赤くなった立野は、やがて、

「専門家から見て、このお嬢さん、何年生ぐらいだと思うね」と言った。

「五年生」

即座に信吉はこたえた。

「中学……二年生かしら」

容子は奇妙なものを見るように、じっと少女をみつめながら言った。

「差が開いたね」

立野は愉快そうに老画家を見た。老画家は会話には関心なげに雲丹^{うんたん}を舐めたり、フランスの焼酎^{しょうしゅ}というのを舐めたりしていた。

「何年生なんですの？」

「無年生」

「なに？」

「学校に入っていないんだよ。だから無年生。入っていないというより、入れてないんですね、先生」
「まあ……」

めんどくさそうに言って、老画家は少女のぱくついているレタスに手を伸ばした。レタスを引き裂き、塩をまぶす手つきが、少女とそっくりであった。

「日教組がね……」

老画家は口をもぐもぐさせた。齒がまいつている。

「わしは、日教組が嫌いなんですよ。日教組の親玉と喧嘩しましてね。それで入れません」

「どう、面白いだろう」

と、立野は手柄顔だった。信吉の興味をかきたてなければ、立野の仲介者の役割は果されないのであった。

「喧嘩ねえ」

とだけ信吉は言った。信吉も容子も日教組の組合員だった。二人共、分校勤務ということで、組合活動にはあまり積極的に参加することはなかったが、積極的に組合を否定するというのもなかった。

「それで、勉強は？」

容子が訊ねた。

「わしが教えますよ、英語でも、フランス語でも」

「先生が忙しいときは、東大の学生を家庭教師にするのだそうですよ」

立野がつけたした。

「お孫さん……なんです」

今まであからさまに訊きかねたことを、やっと口に出すきっかけができたように容子が言う

と、

「そうです、娘の……」

「娘さんが離婚でもなさったんですか」

「まあ……、ちよつと複雑だが……」

「銚子を」

と信吉は容子を促した。信吉は少し苛立った眼つきになっていた。その眼は他人の事情に興味を持ちすぎるな、とも、どうせ嘘っぱちなことに本気になるな、とも言っているようであった。燭をつけに立ち上がってから、容子は寡黙になった。渉外は信吉にまかせる習慣であった。信吉が酔い痴れるところまでいったのは、二時間ぐらいたってからだった。座を繕うことに懸命になっていた立野は、疲れて眠そうな顔になっていた。

「どうです、先生」

信吉は少し横柄な口調で言った。

「この分校に、お孫さんを留学させるおつもりはありませんか」

「そうしうか」

造作もなく老画家はこたえた。立野は眠気がさめたように、

「そりゃあいい」

と言った。

「ユニークな教育をやってますよ、この分校は。こいつは、ちよつとその辺の教師と違いますから」

「日教組臭はあまりない筈です。おろかな画一教育もやりませんよ」

「そう、画一化はいかんよ、君。人間は自由に育てなくちゃ」

老画家はほとんど酔っていなかった。フランスの焼酎をコップに二つほど飲んだだけである。下臉が下がって、逆三角のけわしい眼をしていた。

先ほどから、老画家は、昔のフランスのアナーキストのことや、大東亜戦争の開戦の部分的内幕や、著名な画家の棚下しなどについて、脈絡なく呟いていた。

それで、分校留学の話もそのまま海草の食^く方の話題に移行してしまい、呼んだタクシーが来て立野一人だけが帰ってしまうと、どれ、寝^ねかしてもらおうか、と立ち上がって、画家は便所の方へ行った。

すでに居眠りをしていた容子が、あわてて特別教室兼用になっている小さな教材室に蒲団を敷きに行ったあと、持って来た漫画本に読みふけていた少女が、急に信吉ににじり寄って首に腕をまわした。

「ね、留学の話、ほんとう？」

「まあね」

「ね、あたし、入ってあげてもいいわよ」